地方における技能実習生の生活行動の分析と検討

勝見 薫[*1]
指導教員：太田 洋希[*2]
Email: yangxi.kunori@gmail.com

[*1]:山形県私立九里学園高等学校プログレスコース 3 年
[*2]:山形県私立九里学園高等学校

◎Key Words　多文化共生　技能実習生　地方における外国人

１．はじめに

(１)問題の所在と研究目的

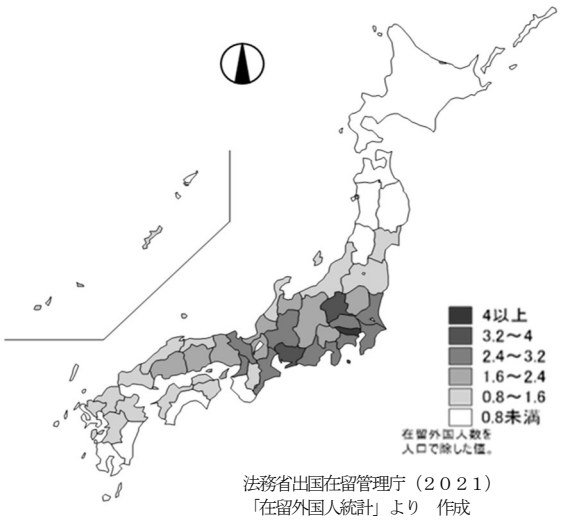
訪日外国人や日本に在住する外国人は，年々増加しており，我々との接点も徐々に増えつつある。観光，留学，技能実習などの短中期的な理由から訪日する外国人が多いが，長期的に住む外国人も居住している。

図 1 は，都道府県ごとの外国人の割合を示したものである。外国人が集住する地域には偏り，特に東京などの大都市に集中している。横浜や池袋，新大久保などのエスニックタウンも首都圏に分布している。一方地方は首都圏に比べると外国人の割合は小さく，本稿で対象とした山形県も割合は特に小さい。山形県は 7,826 人，米沢市には 742 人の外国人在住者が暮らしており，他都道府県に比べ少ないが一定数の外国人が暮らしているということも事実である(表 1)。

山形県米沢市にある九里学園高等学校にて実施した米沢市在住の外国人数名との座談会では，外国人が様々な情報をより得やすいのは地方よりも東京であるとの指摘があった。メディアに取り上げられる「外国」に関する情報も，新大久保などのエスニックタウンが多いと感じられる。実際に地方に住んでいる外国人からの指摘であり，都市と地方での情報格差の存在は無視できないといえよう。

日本における外国人に関連する研究では片岡(2016a)や山下(2016)などのエスニックマイノリティが集住するエスニックタウン研究があげられる。片岡(2016a)では，ブラジル人が多く集住する浜松市において，在日ブラジル人を対象に日常生活活動について調査を行った。生活活動の分析から，「自宅型」「家庭内完結・消費志向型」「家族外ネットワーク・消費志向型」に分類することができた。在日ブラジルの多くは，「家庭内完結・消費志向型」として，家庭内で完結する比較的閉ざされた個人的ネットワークの中で生活し，自宅内での余暇活動よりも，ショッピングモールなどの日本の大型商業施設で消費活動を送ることが多い。また，日本店を多く利用する「消費活動という側面に限定された同化」が在日ブラジル人の中で進行し，ホスト社会住民との接触機会が増加しており，このことがブラジル人とホスト住民側との間で，軋轢や偏見を生み出す可能性があると指摘している。また片岡は，ホスト住民との接点がきわめて少ない外国人を「顔の見えない」(つまり「可視化されない」)外国人と称している。日常生活の分析から就労以外の場面で「顔の見えない」状況がより進んでいる一方で，商業施設や娯楽施設における消費活動が多くみられ，接触の場面は限定されているものの，次第に「顔の見える」存在へと近づいてきていると論じた。

しかし，このように少しずつ「顔の見える」存在になりつつある外国人は，エスニックタウンを形づくる外国人や，外国人が多く集住する地域に限られるであろう。一方で可視化されない外国人は，山形県などの



法務省出国在留管理庁（２０２１）
「在留外国人統計」より　作成

図１　都道府県ごとの外国人の割合

表１　在住外国人数とその割合

	在住外国人（人）	在住外国人の割合（%）
全国	2,887,116	2.30
東京都	560,180	4.01
大阪府	253,814	2.88
山形県	7,826	0.72
＊米沢市	742	0.92

厚生労働省山形労働局報道発表資料(令和４年度)より

表２　山形県における外国人労働者数の割合

在留資格	人数(人)	割合(%)
専門的・技術的分野	575	13.0
特定活動	91	2.1
技能実習	2,175	49.1
資格外活動	157	3.5
身分に基づく在留資格	1,429	32.3
不明	0	0.0
計	4,427	100

法務省出国在留管理庁（２０２１）「在留外国人統計」より

きわめて外国人が少ない地方部に多く存在すると推測でき，彼らのような外国人は何らかのコミュニティにほとんど属していない可能性が高く，地域から孤立している可能性が高いと考えられる。また表 2 によると山形県における在住資格別外国人労働者数のうち技能実習生は 49.1%と約半数を占めており，より地域から取り残された外国人が多いのではないかと考えられる。

可視化されやすい都市部やエスニックタウンに居住する外国人の生活やホスト社会との関係について論じられることは多いが，外国人数が少なく可視化されにくい一地方における外国人の生活などの実態を明らかにした研究などは管見の限りほとんど見られない。

以上より本研究では，山形県置賜地域に居住する，より何らかのコミュニティに属すことが少ないと考えられる技能実習生を対象に，日常の生活についてその実態を明らかにする。また，技能実習生とホスト社会との関わりや，コミュニティの在り方について考察し，彼らを取り巻く諸課題を解決するための方策を検討する。

（2）研究方法

生活活動調査アンケートを実施し，調査対象とする外国人の日常生活を分析する。それらの結果をもとに置賜地域に居住する技能実習生を取り巻く諸課題を明らかにし，それらを解決するための方策を地域の人々や諸団体と協働し検討する。

2．山形県置賜地域における技能実習生の生活行動

（1）調査方法

2022 年 6 月 20 日～26 日にかけて，山形県置賜地域在住の 18 名の技能実習を対象に調査をおこなった（表３）。質問項目は性別，国籍，滞在期間，ビザの種類，同居人，多くの人と交流をもちたいかについて日本語，英語，ベトナム語の３種類を配布した。生活活動日誌調査用紙（図２）は，平日と休日２種類を用意し，それぞれの１日の過ごし方を調査した。なお休日とはシフトが休みの日のことを指す。この活動日誌法は荒井ほか(1996)のフォーマットを参考にした。

（2）調査結果

回答者は，年齢は 20 歳から 25 歳，国籍はベトナムまたはインドネシアであった。これら 2 か国は近年置賜地域で増加傾向にある。ビザの種類は技能実習 1 号・2 号である(1 号とは入国後 1 年目の技能などを習得する活動資格であり，2 号とは入国後 2.3 年目の技能等に習熟するため活動資格)。車を保有しておらず交通手段は基本的に自転車を使う人が多かった。外国人にとっ

表３　アンケート調査対象者

回答者	性別	年齢	国籍	滞在期間	ビザ	同居人
1	男	24	ベトナム	3 年未満	技能実習 2 号	実習生 2 人
2	男	25	ベトナム	3 年未満	技能実習 2 号	実習生 2 人
3	男	24	ベトナム	3 年未満	技能実習 2 号	実習生 2 人
4	男	24	ベトナム	3 年未満	技能実習 2 号	実習生 1 人
5	男	22	ベトナム	3 年未満	技能実習 2 号	実習生 1 人
6	女	20	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
7	女	21	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
8	女	20	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
9	女	20	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
10	女	23	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	なし
11	女	20	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
12	女	21	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
13	男	22	ベトナム	2 年未満	技能実習 2 号	実習生 1 人
14	男	22	ベトナム	1 年未満	技能実習 1 号	実習生 1 人
15	男	22	インドネシア	半年未満	技能実習 1 号	実習生 3 人
16	男	22	インドネシア	半年未満	技能実習 1 号	実習生 3 人
17	男	22	インドネシア	半年未満	技能実習 1 号	実習生 3 人
18	男	22	インドネシア	半年未満	技能実習 1 号	実習生 3 人

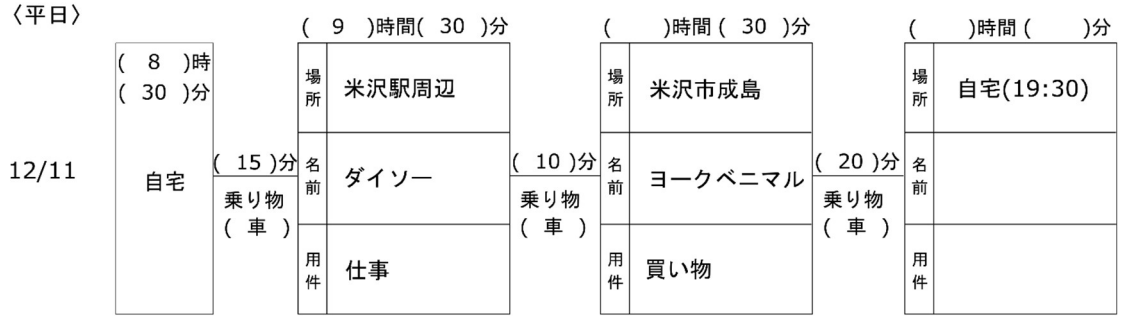


図２　　生活活動日誌調査用紙の回答例

		平均生活活動時間(時間)			ネットワークに所属する平均時間(時間)	
		就労時間	買い物時間	余暇時間	家族同居人	友人
平日	男性	8.0	0.3	0.0		
	女性	8.0	0.4	0.0		
休日	男性		0.6	11.0	11.4	
	女性		0.9	0.8	1.7	

図３　山形県米沢市における技能実習生の平日及び休日の平均生活活動時間

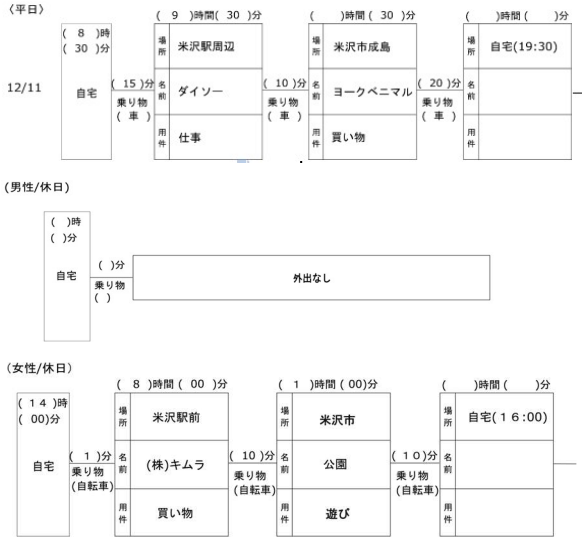


図４　「平日」「休日(男性)」「休日(女性)」のおもな回答パターン

て日本での運転免許の取得は言語の問題等もあり非常に難しいようである。そのため，買い物などの余暇活動や休日の娯楽は自転車での行動が可能な範囲の最寄りのスーパーや公園に限られていた。

特に男性と女性で差異が見られたのは休日の過ごし方である。ほとんどの女性は同居人や仕事の同僚と買い物に行ったり公園で体を動かすことが多く，行動人数も複数人で行動し，行動範囲も拡大することがわかった。男性の場合は自宅から一歩も出ないで過ごすいわゆる「自宅型」の人が多く見られた。また，今回協力いただいたすべての技能実習生が多くの人と交流をもちたいと回答していた。しかし，そう思っている反面，日々の生活の中では同じ技能実習生同士以外との交流はもっていなかった。

技能実習生は日本語や英語がほとんど話せない(日本語は簡単なフレーズ程度)。このことは技能実習生にとって他者と関わりをもちたくても，実際に関わりをもつことが難しくなっている一つの要因である。現状として男性の場合，一日中自宅で過ごす「自宅型」の傾向が見られ，女性の場合は買い物や公園で遊ぶなど地域の中に溶け込んでいるようにも見えるが，同居人同士などの限定されたコミュニティでのみ生活していることが多い。

３．地域と技能実習生とをつなぐ

(1)地域住民と外国人在住者をつなぐ米沢市国際交流協会(YIRA)

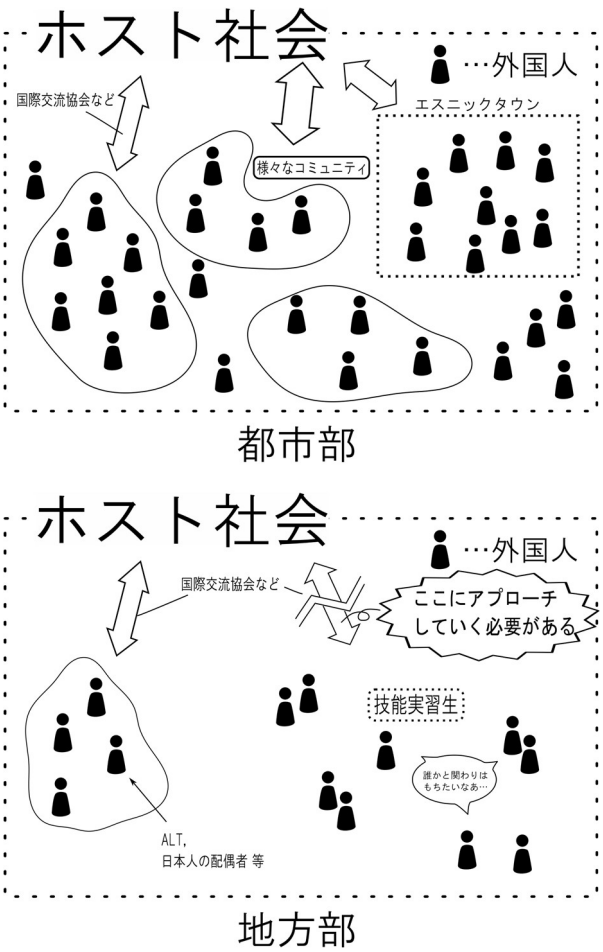


図５　都市部及び地方部における
ホスト社会と外国人との関わり
(筆者作成)

地域と外国人とをつなぐものとして各自治体にある国際交流協会などがあげられる。米沢市にも米沢市国際交流協会などがあり，平成８年３月に市民の国際交流に対する理解と関心を高めるための活動を行うとともに，関係機関等との相互理解と友好親善に寄与することを目的に設立された。

多言語読み聞かせ，国際理解講座，外国料理教室，餅つき新年会，親子外国料理教室など外国人居住者が地域住民とのコミュニティを作ることができるイベントを行っている。しかし，参加者は，日本人の会員が一番多く，外国人参加者については経済的にも余裕のある ALT，次いで日本人の配偶者や家族帯同ビザをもつ日本語教室に通う方の順で多いことがわかった。技能実習生の参加者は限りなくゼロに近く，参加者は常に同一であり，ごく限られた人々のコミュニティとなっている。さらに，米沢市国際交流協会の関係者によれば，外国人が米沢市に転入届を出す際，米沢市役所市民課より多言語生活情報，国際交流協会の案内，入会申込書等の案内書類を配布しているが，国際交流協会の入会につながるケースは少ないとのことである。さらに，経済的余裕と車を保有している ALT と比べると，技能実習生は残業が多く経済的余裕も行動範囲も限られることから技能実習生の参加者は増えないと予想される。

(2) 技能実習生と交流できるイベントの開催

これまでの情報をもとに，図 5 に都市部及び地方部

図６
2023 年５月に実施した
イベントの様子とチラシ

におけるホスト社会と外国人との関わりについて模式図を示した。地方部における本稿で対象としている技能実習生の多くは，他者と交流をもちたいと思っている反面，日々の生活では同じ技能実習生同士以外との関わりをもっていなかった。さらに先述のように，外国人に交流の機会を提供する役割を担う国際交流協会が，技能実習生に対してはほとんどアプローチできていない状況にある。そのことから，筆者は米沢市国際交流協会と協働し，技能実習生へのコミュニティ提供となるようなイベントを開催することにした。米沢市国際交流協会が技能実習生にうまくアプローチできていないことについては先述通りだが，技能実習生の参加を募るという点で何らかの工夫が必要である。

今年の 5 月に筆者はスポーツイベントを主催した。その際には技能実習生を多く雇用している企業に周知することを徹底した。共催として国際交流協会が関わっているという点で，企業側にとって技能実習生をイベントに参加させるという抵抗感が軽減されると思われる。今後は，7 月に国際料理教室，10 月は芋煮会，1 月に餅つき新年会を国際交流協会が主催し，著者が共催として技能実習生の取りまとめをおこなう計画を立てている(表５)。スポーツイベントには関係者も含め延べ 20 人，うち技能実習生 4 人が参加した。参加した技能実習生からは楽しかった，新しい友達ができた，また参加したいなどの感想があった。さらに技能実習生とは別に新規の外国人の方も数名参加し日本語教室に通うことも決まったようだ。また，10 月の芋煮会に合わせ，技能実習生と，地域住民，九里学園高等学校の生徒を対象にしたホームステイを企画検討中である。

４．おわりに

本研究では山形県置賜地域に在住する技能実習生を対象にホスト社会における日常の生活活動空間・時間について生活活動日誌データやアンケート調査を用いてその実態を明らかにするとともにホスト社会における技能実習生の特質や課題を考察し，取り巻く課題を解決するための方策を検討した。生活日誌データより仕事日は我々日本人と同様，自宅と職場の往復または仕事終わりに買い物に行く様子が見受けられた。休日は同じ技能実習生で同居人の仲間と買い物に行ったり公園で遊んだりして過ごすことがわかった。男性の場合，一日中家で過ごすという場合が多く，女性の場合日本人には見受けられない特徴として公園で遊ぶという傾向があった。アンケート調査では全員が多くの人と交流をもちたいと回答したが日々の生活の中では地域住民との交流の機会はなかった。そこで米沢市国際交流協会(YAIR)と協力し技能実習生が多くの人々と関わるきっかけとなるようなイベント開催した。しかし，たった数時間の交流だけではコミュニティの形成とはいえず，持続的なイベント開催が必要であろう。

表５　イベント開催の予定

日付	内容	主催・共催
5 月 27 日	スポーツイベント	主催　筆者 共催　YIRA
7 月	料理教室	主催　YIRA 共催　筆者
10 月	芋煮会	主催　YIRA 共催　筆者
1 月	餅つき新年会	主催　YIRA 共催　筆者

謝辞

本研究を進めるにあたり，九里学園高等学校プログレスコースの先生方には適切なご助言，様々な視点からのご指摘を賜りました。感想申し上げます。また，米沢市国際交流協会(YAIR)前事務局長横山昭子様，事務局長色摩彩佳様，国際交流委員シューベルトトリート B 様，また米沢市卸売業センター，株式会社フーディー，ナカノアパレル山形本社会場，技能実習生の方々には大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

参考文献

荒井良雄・岡本耕平・神谷浩夫・川口太郎（1996）『都市の空間と時間：生活活動の時間地理学』，古今書院.

池上重弘（2016）「浜松市と企業・大学・市民による外国人住民受け入れの経緯と課題」，『社会政策』８(1)，pp.57-68.

片岡博美（2016a）「エスニック集住成員とホスト社会との接点ーブラジル人移住の「日常」を分析するー」，山下清海編『世界との本の移住エスニック集団とホスト社会ー日本社会の多文化に向けたエスニックコンフリクト研究』明石書店.

片岡博美（2016b）「地域防災の中の「外国人」-エスニックシティ研究から「地域のコミュニティ」を問い直す為の一考察-」，『地理空間』９（3）,pp.285-299.

山下清海（2016）「ニューチャイナタウンの形成とホスト社会ー池袋チャイナタウンの事例を中心にー」，山下清海編『世界との本の移住エスニック集団とホスト社会ー日本社会の多文化に向けたエスニックコンフリクト研究』明石書店.

仙田武司・小菅扶温（2020）「外国人材受け入れの課題と地域日本語教室の役割-持続可能な地域づくりの観点から-」，『日本語教育』(176),pp.1-15.

相田華絵・森淑江（2021）「技能実習生の健康に関する分権研究-国際生活機能分類（ICF）を用いた一考察」，『産衛誌』63（5）,pp.162-178.